

中国的な「鮮烈」と日本的な「円やか」^{まろ}

——両国の言語・文化の特質の一端（1）

夏 剛

「光彩・彪炳」要素を選好する中国語と彡旁・豸偏・火偏を敬遠する日本語
——英熟語“Show the flag”に絡む漢・日成語「旗幟鮮明」の比較を切り口に

香港出身のアグネス・チャン（本名・陳美齡^{チェンメイリン}）は、1972年に日本で歌手として出世した後、タレント・エッセイスト・日本ユニセフ協会大使（初代、1998年～現在）^{など}として活躍して来た。彼女は1986年に日本人と結婚し、翌年カナダ（昔の留学先）で長男を産み、その直後テレビ番組の出演に復帰したが、要請したテレビ局の配慮で乳児を連れて行った事に因り、作家林真理子^ら等から周囲の迷惑への無自覚やプロ意識の欠如を非難された。カトリック教徒としてのその洗礼名を冠した「アグネス論争」は、1988年「新語・流行語大賞」（自由国民社主催）流行語部門・大衆賞を受賞した^{ほど}程、昭和末期の日本社会に女性自立の課題を再考させる契機と成った。

四半世紀後、彼女は『読売新聞』2013年8月20日の特集「Nippon 蘇れ 私の処方箋」で、日本人には個人の自立が足りないと斬った。とんでもないアイデアを実現させるには、海外の文化や考え方を学ぶ必要が有り、その為に外国語の学習を勧めたいと言う。「英語なら、“アイライク……”と言った時点で自分の意見をハッキリ示す。でも日本語は、最後まで聞かないと“好き”なのか“嫌い”なのかわからない。つまり、人の顔色をみながら結論を変えられる。そうではなくて、意見をハッキリ決めてからしゃべる文化があることを英語は教えてくれる。」曰く、「そうした体験を重ねる中で、他の国の人たちをリスペクト（尊敬）していけるかどうか日本再生のカギを握る」。

学ぶのは英語でなくてもいいと付け加えた様に、彼女の母語である中国語も日本人にとって異文化の要素が強い。香港芸能界の子連れ出勤の風習は、前出の「アグネス^{バッシング}敲击」で非常識とされたが、日本語の流儀と正反対の上記の英語の表現様式は、中国語の常識とも通じる。Iの後にlikeが来ると価値判断は明らかに成るが、「旗幟鮮明」という成語がこれに当て嵌まる。2001年「9.11」同時多発テロ事件の4日後、アーミテージ米国務副長官が日本に共闘を求める

べく、柳井俊二駐米大使に“Show the flag”（旗を見せろ）と言いつつ放った。この英熟語は軍艦等の派遣で国力を顕示し權益を主張する意も有るので、「日章旗を見せろ→自衛隊を派遣しろ」と取れなくもないが、「旗幟を鮮明にせよ」と理解した方が妥当であろう。

「旗幟鮮明」は初出の『三国志（通俗）演義』（中国での通称＝『三国演義』）では、軍陣の旗が色鮮やかな様の形容に使われている。元末～明初に羅貫中が著したこの歴史小説は、日本でも江戸時代から親しまれて来た（通称の『三国志』は中国では、[西晋] 陳寿が撰した全65巻の史書を意味する）が、小学館『日本国語大辞典』第2版（全14巻、2000—02年刊。以下、他の辞書引用と同様、特に断らない限り、この最新版を指す）の「旗幟鮮明」の項では、簡単に拾えるはずの漢籍の出処は記されていない。中国語所縁の言葉として認識されていないのか、「旗色のあざやかなこと。また、立場や主張が明確であること」という語釈の後に、日本の書物から採った用例を2点挙げている。1つ目の「*自由、道德、及儒教主義（1884）〈徳富蘇峰〉三“哲学派は冷淡静幽なりと雖ども兵器精鋭、旗幟鮮明、正々の陣、堂々の旗”は、漢文調の言葉遣いらしく彼の中国古典文学の名著の用法に通じる。2つ目の「*血（1927）〈岡田三郎〉“融和し得ないとしても、たがひに旗幟鮮明（キシセンメイ）なのは嬉しいではないか”は、20世紀の日本語が中国語を発展させる形で創出し且つ逆輸出した語義の源だと認定できよう。

『漢語大詞典』（羅竹風主編、全13巻、[上海] 漢語大詞典出版社1986—94年刊）の当該項目では、語釈は「比喻政治傾向非常明顯或態度很明確」（政治的傾向が非常に顕著であること、或いは態度がとても明確であることの譬え）のみで、『三国志演義』が出典の元の語義は消えている。現代の使い方の政治的な色彩の濃厚さを示す変化とも言えるが、2つの用例の初出は董必武（共産党の元勳）の「広州起義三十周年記念」詩である。件の「起義」は1927年12月11日に党が国民党支配下の広州で起した武装蜂起なので、両国の最大規模の国語辞典で示された自国の早期の用例は恰度30年の開きが有る。

ところが、「反“右派”闘争」という名の思想弾圧・政治粛清が発動された1957年以降も、この成語は中国の朝野で屢々使われ、使用頻度が逆輸入先の日本を遙かに超えている。現に、新村出編『広辞苑』第6版（岩波書店、2008年）では、この成語は「鮮明」の項の中の「旗幟一」の形でしか出ておらず、「旗幟」の項の例文も4字熟語ならぬ「一を鮮明にする」である。対して、規模・権威度俱に『広辞苑』に当る『現代漢語詞典』の同じ第6版（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編、[北京] 商務印書館、2012年）では、「旗幟鮮明」の項が設けられている（語釈は「指観点、立場非常明確」[観点・立場が非常に明確であることを指す]）。古代中国語の意が日本語の再創造に取って代られ、日本発の新しい語義が中国でより愛用されているとは、両言語の相互影響に由る変容の連鎖・交錯の様に見える。

中国語は日本語からこの意味を取り入れたと思われるが、日本では米国の苛立ちが示した様に旗幟を鮮明にすることが難しい。逆に中国人は言語の構造や思考回路の類似で、欧米人並み

中国的な「鮮烈」と日本的な「円やか」——両国の言語・文化の特質の一端 (1) (夏)

に堂々と自己主張をし勝ちである。主語→述語→目的語という通常の語順に由って、述語が出た時点で話の内容や意向が可也示されて了うことが多い。毛沢東時代 (1949—76) に起った 20 世紀中国史上有数の「文字の獄」として、1955 年 5 月 16 日に文芸評論家胡風が自宅捜査・拘束を受け、彼を頭とする「胡風反革命集団」への摘発が全国で展開された。18 日に全国人民代表大会 (国会) 常務委員会が胡の逮捕を追認 (前年 9 月 20 日に成立した憲法の第 37 条で規定された代表 [議員] の不逮捕権を事後剥奪) し、更に 25 日、中国文学者・芸術家連合会、中国作家協会の合同会議で彼の除籍・役職解任が決定された。その際に飛び出た 1 人の反逆者の不規則発言が、上記の言説法則の好例に為る。

700 人余りの出席者が挙手で可決した後、20 数人が演壇に登り当局への追隨を表明したが、美学者・翻訳家の呂癸が敢然と異論を唱えた。彼は司会する郭沫若 (文壇の大御所、前副総理 [初代]) の隣のマイク付きの席に坐るなり、「胡風不是政治問題、是認識問題」(胡風のことは政治の問題ではなく、認識の問題です) と臆面も無く切り出した。続いて「不能説他是反……」と言い掛けた処、満場騒然、怒号飛び交う中で言葉が掻き消されたが、次は「革命」に決まっており、「彼は反革命だとは言えません」と言おうとすることが予測できたわけだ。「不能説」(~とは言えない) と断言した時点で、先ず否定の立場を明らかにしている。「他是」(彼は~だ) という判断文の鍵詞を為す罪名の最初の字が出た瞬間、既に後の言葉は疑う余地が無く、文全体が自明に成って来る。其処で直ちに明白な「反動的」言論と見られ、彼は直ぐ発言権を奪われ自宅に連れ戻され軟禁された。

李輝著、人民日報出版社 1989 年刊『胡風集團冤案始末』(「胡風集團」冤罪の顛末) の中に、この場面は登場している。日本語版 (千野訳政・平井博訳『囚われた文学者たち』、岩波書店、1996 年) では、件の未完の文は「言えるはずがないのです、彼が反……」と訳されている。¹⁾ 「不能説他是反……」と完璧に対応する模範的な訳文と言えるが、「不能説他是反革命」に当る通常の日本語の「彼は反革命だとは言えません」は、最後まで聴かなければ主旨は判るまい。又、「彼は反革命だとは」と言った処で、「言えません」が言い辛い様な会場の空気に圧されて、「俄に信じ難いですが……」とか「言い切れるかどうか……」と言葉を濁し、更に「私はやはり党の英断を擁護します」と方向を変える様な、中国語では逆様に成っても出来ない真似は幾らでも出来る。

英語の presentation と key word に対応する中国語の「陳述」と「關鍵詞」は、字面で「述」(述べる) と「關鍵」(要。鍵) の重みを思わせるものだ。実際にも上記の意見開陳の場面では、述語や鍵詞を口にした途端に話し手の運命が一発で決められた。陳美齡と同じ日本籍中国系人 (台湾出身) で、「金儲けの神様」と呼ばれた作家・実業家の邱永漢 (故人) は、「中国人は本当はバクチと政治が大好き」だと指摘したことが有る。²⁾ 正義感に駆られた呂の政治的な発言は投機的な要素が無いが、捨て身の姿勢は「骰子は投げられた」(The die is cast!) という、

共和政羅馬期の政治家・軍人のカエサルが元老院に背いて軍を率いて北伊太利のルビコン川を通る際（紀元前49年）の名言を連想させる。呂の唐突な言行は純粹無垢な個性に由る部分が大きい。述語・鍵詞を一気に吐き出すその「賽」の投げ方には、明快な自己主張を展開し易い中国語の特徴が見て取れる。

カエサルのルビコン渡河の際の言葉から来た上記の熟語は『広辞苑』で、「事ここに至った以上は断行するほかはない。後戻りはできない。事すでに決す」と解釈されている。「一は投げられた」という追込項目の親項目は「さい【采】」で、語釈は「①双六・博奕ばくちなどに用いる具。角つの・象牙・木などの小形の立方体で、その六面に、一・二・三・四・五・六の点を記したもの。さいころ。「骰」「賽」とも書く。「一の目」②采配の略」である。「さいころ」の項目の見出し語は『日本国語大辞典』と同じで、「骰・賽」とは逆の順番を為す「賽子・骰子」である。『広辞苑』の「采」に当る『日本国語大辞典』の「采・賽・骰子」の項目は、漢籍の引用が無く和製漢語として認識されている。『日本国語大辞典』で「采配・采幣」と表記する単語も和製漢語（対応する中国語は「麾令旗」と「指揮・指示・命令・安排」等）なので、この項目は「日本的」の純度が高い様な印象を受ける。一方、『広辞苑』第4版（1991年）の「采」には、中国語との密接な関連を感じさせる多義が示されている。上記の両義は最後の⑤⑥と為っており（⑤は用例が無い）、前に「①とること。えらぶこと。「一配」「一詩」②いろいろ。あや。「一色」「文一」③かたち。すがた。「風一」「神一」（23は「彩」に通用）④臣下に支給された領地。食邑。知行所。「一地」「一邑」と有った。³⁾「骰子」や「采配」をも含めた此等の意味や単語には、漢字を共有する両言語の共通点・相違点の同居・交錯が見られる。

中国語の「采」は『現代漢語詞典』が示す様に、実に多彩な意味を持っている。「采¹」は〔動〕①摘（花はな、葉子、果子）。②開采。③搜集。④選取；選（〔動〕①〔花・葉・果実を〕摘む。②採掘する。③収集する。④選び取る。選ぶ）。「采²」は「①精神；神色。②（Cǎi）〔名〕姓」①精神〔状態〕。表情。②〔名〕姓氏の一）。「采³」は「旧同“彩”①—⑦」（古くは「彩」①—⑦と同じ）である。同じ cǎi と読む「彩」の項の8つの語義の中で、唯一「采」と混用できないのは最後の「姓」である（人名、地名等の固有名詞の場合、拼音〔中国語の発音を表記する羅馬字、又その音〕の頭は上記の通り大文字と為る）。「采」はその第3声の他に第4声の cài の項も有り、「〔名〕古代諸侯分封給卿大夫的田地（連同耕種土地的奴隸。也叫采邑）」（〔名〕古代の諸侯が卿・大夫に分封した耕地〔土地を耕す奴隸付き。「采邑」とも言う〕）である。『日本国語大辞典』の「采邑」の項では、漢籍の出所として「*春秋左伝注-昭公二二年“（劉子如、劉）歸其采邑”」を引いているが、『広辞苑』の④の由来と為るこの語義は文字が同じでも声調が違うので、多岐に渉る中国語の複雑さと一堂に集める日本語の曖昧さが此処で現れる。日本語の「文采」「風采」「神采」「采邑」等は中国語からの輸入なのだが、中国語の「采」の意味に無い「賽子・骰子」は、中国語では「色子」（shǎi·zi）が一般的で、方言として別項の「骰子」

(tóu · zi) も有る。

日本語の「采」と中国語の「色子」は、字面では風馬牛の様に見えるが、俱に「彩」の義・音と通じる処に接点がある。上記の通り「采」は「彩」に通用する部分が多い/多かった(中国語では今は全て混同できない)が、「彩」と「色」は先ず両言語共通の「彩色・色彩」を構成できる。『広辞苑』第4版の②の説明に有る「いろどり」は、当該項目の見出し語は「色取り・彩り」であり、同版の語釈は「①いろどること。彩色。着色。②色の配合。配色。“一が良い”③はなやかな変化。おもしろみ。“一を添える”」である。①の「いろどる」の項目の見出し語は「色取る・彩る」で、語釈は「①着色する。彩色する。②顔に白粉^(おしろい)や紅^(べに)・黛^(まゆずみ)をつける。化粧する。③種々の色をとりあわせて飾る。潤色する。④身なりを飾る。めかす。また、色っぽい様子をする」(用例略)である。「【他五】」と記すこの動詞の①の中の「彩色する」は、中国語の見地からすれば二重の違和感を覚える。『現代漢語詞典』の「彩色」(cǎisè)の語釈は、「名多種顔色：～照相」(【名】種々の色。“カラー写真”)である。同じ単語は中国の辞書では動詞とされ、日本の辞書では名詞とされるという場合が多いが、「彩色」の品詞はその逆なので異例の部類に入る。

「采配」に当る中国語の「指揮」は『現代漢語詞典』で、「①動発令調度。②名発令調度的人。③名在楽隊や合唱隊前面指示如何演奏或演唱的人」(①【動】指図をする。②【名】指図をする人。③【名】楽隊や合唱隊の前で演奏や演唱の仕方を指示する人)と説明されており、主と為る①は行為を表すので当然動詞なのである。『日本国語大辞典』の「指揮・指麾」は専ら名詞で、「【名】(“指”は指示, “揮”はさしず旗の意) ①さしずをすること。下知(げし)。②合唱, 合奏, 管弦楽, 交響楽など二人以上の奏者による演奏をまとめて, 演奏効果を高める行為。コンダクト」と為っている。①には「*史記-陳丞相世家“誠各去_二其兩短_一, 襲_二其兩長_一, 天下指麾定矣” *杜甫-行次昭陵詩“指揮安_二率土_一, 蕩滌撫_二洪鐘_一”という、2種類の表記に対応する漢籍の出典を載せているが、中国語の論理では何れも名詞と考えるのは無理がある。「指・揮=指示・指図旗」は図らずも命令形の“Show the flag”の指図と繋がって来るが、人を動かす「指揮」は名詞、物に色を着ける「彩色」は動詞という属性区分は倒錯の様に映り、又主体性と客観性、能動と無為や対人・物の接し方に関する日本的な感性への興味を誘う。物に色を塗って飾る「彩色」の動詞扱いは深読みをすれば、邱永漢が「職人の国」と名付けた⁴⁾日本の物作りの伝統や美への追求の強さを思わせる。

『広辞苑』には「彩色」, 「^{さいしき}彩色」の2項目が有り、前者は後者(第5版[1998年]から新設)の項が⇒を以て「解説はその項目を見よ」と指示した主項目である。品詞の表記が無いものの、「いろどること。いろどり。着色。“一を施す”“一画”という語釈は、名詞であることを示している。因みに、『日本国語大辞典』の「^{さいしき}【彩色・綵色】」は名詞で、「①(一する)いろどること。物に色を塗って飾ること。また、そのいろどり。着色。さいしよく」の様に、動詞

化の使い方も有る。この項では「*江淹-雑体詩“彩色世所_レ重、雖_レ新不_レ代故_レ”」という漢籍を引いているが、「さいしよく【彩色】」の方は日本語文献の出典のみである（語釈＝「[“しよく”は“色”の漢音]“さいしき【彩色】①”に同じ）。『広辞苑』では関連の「彩色く」は動詞（『他四』）で、「（“彩色”を活用させた語）彩色を施す。いろどる。えどる」という語釈も、同義の動詞や動詞中心の熟語を用いている。「彩り・彩^{フレーズ}」や「形・姿^{あや かたち}」の意では「采」は「彩」に通用すると言うが、「①色どり。②風采と顔色」という意の「采色」は、「彩色」とは発音も違う別々の単語である。多^{さんづくり}旁（「さんづくり」とも。中国語では「三撇」[撇＝左払い]）の有無で微妙に異なるが、形（これも同じ部首）や音の類似から意味の相通が色々々と味わえるのは漢字の趣^{おもむき}である。

『日本国語大辞典』の「采色」の語釈は、「[名] ①（“采”は姿、形の意）風采と顔色。顔つき。②（“采”は美しい意）美しい色どり。転じて、女性の美しい顔」である。漢籍出典として①の「*莊子-人間世“采色不_レ定、常人之所_レ不_レ違_レ”」、②の「*孟子-梁惠王・上“抑為_レ采色不_レ足_レ視於目_レ与、声音不_レ足_レ聽_レ於耳_レ与”」が引いてある。『漢語大詞典』の4つの語義の中では、『孟子・梁惠王上』：“抑為采色不足視於目与？”が初出と為るのは①の方であり、「指絢麗の顔色」（美しくて眩^{まばゆ}い色を指す）という語釈を見る限り、「女性の美しい顔」という転義は和製の可能性も有る。『莊子』の方は逆に「②神色、容態」（表情。風貌）の唯一の用例を為すが、日本語に無い意味として③「文辞の色采」（文辞の光彩）、④「指某種思想傾向或事物的某種情調風味」（ある種の思想の傾向や物事のある種の情緒・^{ムード あじわい}風格）も有る。③の3つの例示の最初は①の「絢麗」と繋がる様に、「凡文字、少小時須令氣象崢嶸、采色絢爛」という[宋]趙令時『候鯖録』卷八の言である。（『日本国語大辞典』の「絢爛」の項[語釈＝[名]〈形動ナリ・タリ〉①きらきらと光り輝いて美しいこと。また、そのさま。②詩歌や文章の表現に修飾が加えられて鮮やかなこと。また、そのさま]では、漢籍出典は「*蘇軾-与姪書“凡文字、少小時須令_レ氣象崢嶸、采色絢爛_レ”」と為っている。）次の[明]方孝孺『与鄭叔度書』（鄭叔度に与ふる書）の之三の「相如、揚雄之流誇富艷、眩采色」（[司馬]相如・揚雄の輩は富麗を誇り、采色を銜う）の中で、「誇富」は奇妙にも「崢嶸」の字形の右半分の「争采」（采を争う）と対を為している。「争采」は中国語でも日本語でも単語を成さないが、この2字を含む「世人黑白分、往来争采辱」（世人には黑白^{こくびやく わかち}の分ありて、往来して采辱を争えり）は、孔明が作った歌として『三国志演義』第37回の「三顧茅廬」（三たび茅廬を顧みる）の話に出ている（劉備が諸葛亮の草廬を3度もおとず訪れ遂に軍師として迎えた故事から、誠意を尽して再三要請することに譬える成語と為ったこの4字は、日本語では名詞化した「三顧の礼」で対応する）。⁵⁾ 巡り巡って「旗幟鮮明」の出典である『三国志演義』と繋がったのは、漢字の世界の隅々まで覆い尽す「天網」（天が張り巡らす網）の広さを感じさせる。最後は[清末～民国初期]章炳麟『国故論衡・文学総略』の「凡文理、文字、文辞、皆言文、言其采色發揚謂之彰」（凡そ文理・文字・文辞は、皆「文」と言い、

中国的な「鮮烈」と日本的な「^{まろ}円やか」——両国の言語・文化の特質の一端 (1) (夏)

其の采色の発揚は「^{ひび}彰」と謂う)であるが、『日本国語大辞典』にも無い「彰」は又多旁の字である。

「采色」と同じく『現代漢語詞典』『辞海』(第6版、辞海編輯委員会編纂、夏征農・陳至立主編、上海辞書出版社、2009年)で採録されていないこの字は、『漢語大詞典』には「文彩」と定義する項目が有る。「天網恢々、疎而不漏」(天網恢々、疎にして漏らさず)と言う(『魏書・景穆一二王伝・任城王』。老子『道德経』第73章の「天網恢々、疎而不失」に拠る)が、「天網」の疎漏を示す様に典の1つは「采色」の項の同じ文献と少し違って、章炳麟『文学総略』の「凡文理、文字、文辞皆謂之文、而言其采色之煥發、則謂之彰」と為っている。「彰」の内の「彰彰」の項(語釈=「華麗的辞藻」[華麗な辞藻])でも、同著の「研論文学、当以文字為主、不当以彰彰為主」(文学を研究・討論するに当って、文章を主眼とすべきで、美辞麗句を主眼とすべきではない)が例示されている。冒頭の文の述語(動詞)である「研論」は同辞書に項が立てられていないが、同義の「研討」(語釈=「研究探討」[研究・探求・討論する])は、英語の ^{シンポジウム} symposium に対応する「研討会」等の形でも好く使われている。[唐]韓愈「進『順宗皇帝実録』表状」が初出と為るこの由緒有る単語は、「検討」を取り入れた日本語には入っていない。言葉の消長に象徴的な意味を見出そうとすれば、「彰彰」が中国語から退場したのは章炳麟の主張の通り、表面の虚飾より全体の実質を重んじる現実主義が優位に立った結果だとも考えられる。「研論」の由来と思える「研討」の初出は、『順宗皇帝実録』を撰進した際の上表文・報告書であるが、「彰彰」重視の傾向に対する章の異論もその実務的な性格と一脈通じる処が有ろう。章の価値順位に於いて低い「彰彰」は高い方の「文章」に其々多旁が付く文字であるが、「彰」の日本への「上陸→永住」が出来なかったのも、同じ多旁で俱に「あや」と訓読する「彪」と合せ考えれば、文化の溝と相関関係を持つ言語の断層を感じる。

『広辞苑』の「あや【文・綾】」の見出し語に対して、『日本国語大辞典』では「文・紋・綾・絢」と為っている。項目の最後の同訓異字にはこの4字の後「彩・綺」も有るが、多くのコンピュータ電脳漢字対応ソフトに有る「彪」は載っていない。その【文】(ブン・モン)図柄や装飾、また語句・文章その他広く学芸・教養等におけるあや。“文飾”“文様”“繩文”“無文”《古 あや・かざる・いろどる・またら・うるはし》は、【紋】(モン)織物のあや。また、広く、物の面にあるあや。“紋様”“斑紋”“風紋”《古 あや》と音・義の共通性が高い。この為か見出し語の3、4番目の字も「紋」と同じ糸偏で、【綾】(リョウ・リン)あやおりの絹。あやぎぬ。“綾羅”“綾綺”“綾子”(リンズ)《古 あや・あやきぬ》と【絢】(ケン)織物の美しいあや。“絢服”。転じて、きらびやかな美しさ。“絢爛”《古 あや・まだら》は、古層の原義から後の転義まで「文・紋」の延長線上に在る。続いて【彩】(サイ)いろどり。また、そのあざやかさ。“彩雲”“彩色”“色彩”《古 いろ・いろどる・ひかり・うるはし》は、「彩る」^{うるわ}麗しを以て「文」と通じ、次の【綺】(キ)あやぎぬ。“綺羅”“綾綺”転じて、華やかな美しさ。“綺語”“綺麗”《古 かんば

た・うすもの・いろふ》とも繋がるが、見出し語以外の言わば「傍系」扱いは部首の所為も有る様に思える。同じ彡傍の「【彪】(ヒョウ)」は「とらの皮のあざやかな文様。まだら。あや。もよう」の意で、「綾」以外の「文・紋・紵・彩・綺」の何れとも意味上の接点があるが、「虎」と彡傍の両方に敬遠される理由が思い当る。

『日本国語大辞典』の「ひょう【字音語素】」の中の「彪」には、「彪彪/彪蔚, 彪煥, 彪炳/彪乎」という例示が有るが、項目を立てているのは1つも無い。『現代漢語詞典』の「彪」では「③ (Biāo) 名姓」の前の主な語義は、「① 〈書〉小老虎。② 〈書〉虎身上的斑紋, 借指文采」(① 〈文章語〉小さな虎。② 〈文章語〉虎の体に有る斑紋。転じて文采を指す) である。3つの単語の項の中で①の意と為るのは「彪悍」で、語釈及び用例は「[形]強壯而勇猛; 強悍: 粗獷~」(『形]強壯で勇猛な様。剛悍。“豪放で果敢”) である。この単語は『広辞苑』で「剽悍・慄悍」の項が有り (=「すばやくて強いこと。荒々しく強いこと。“一な動き”), 『日本国語大辞典』の「剽悍・慄悍・慄悍」の項(品詞は「[[名][形動]]」)では、「*漢書-陳湯伝“其人剽悍, 好戰伐。”」を典拠に引いているが、日本の古今の用例にも「彪悍」は出ない。②の文例とも為る「彪炳」の項は、「〈書〉動文采煥發; 照輝: ~青史 | ~千古」(〈文章語〉文采が煥發する。照らし輝かす。“史書に輝きを遺す”“千古に光を放つ”) で、「彪炳千古」の項は「形容偉大的業績流伝千秋万代」(偉大な業績が千秋万代に亘って伝わって行くことの形容)と説明されている。日本語で同音の「光明・功名・高名」は奇妙にもこの4字成語の意味に当て嵌まるが、「彪炳千古」の発想・規模は日本人にとって異次元で苦手の部類に入るはずである。

文采煥發の「彪」を論じた章炳麟の名前にも有る「炳」は同辞書で、「① 〈書〉光明; 顯著。② (Bǐng) 名姓」の両義と為っており、①の例は「彪~」と「~蔚(文采鮮明華美)」「(彪蔚[文采が鮮明で華美である様])」である。『広辞苑』第4版の同項の「あきらかなこと。いちじるしいこと。“一として日月の如し”“一然”」は、後に「炳然」が第5版で「炳乎・炳然」に変わり第6版で削除されたが、同辞書に今も項が有るこの単語(語釈 = 「あきらかなさま。著しいさま」)を例示にしている。日本語では同音の「平然」(和製漢語)の発達と対照的に、悄然とした「開店休業」がこの類の古めかしい漢語語彙の現状である。『現代漢語詞典』で未採録の「炳然」は『辞海』では、「炳①」の項(語釈 = 「光明; 顯著」)の用例として、「如: 彪炳; 文義炳然」(例: “彪炳[文采が煥發する。照らし輝かす]”“文義が炳然としている”)という形で出ている。『日本国語大辞典』の「炳」の語釈は、「[[形動タリ] 明らかであるさま。きらきりと輝いているさま。きわだって目立つさま」で、「*名語記(1275)一〇“丙者, 炳(ヘイ)也。夏の時, 万物強大にして, 炳然として著見(あらはしみゆる)也”」を始め、日本語文献の出典が3つ挙げられている。上記の「華美」とこの「夏・強大」とが結び付けば、漢族の先住民や中国(中原)の古称「華夏」の由来に符合する。[東漢]許慎『説文解字』では「華」は「榮」(栄え), 「夏」は「中国之人」(中国[中原]の人)の意であるとされ、この2字の組み合わせは『日

中国的な「鮮烈」と日本的な「^{まろ}円やか」——両国の言語・文化の特質の一端 (1) (夏)

『日本国語大辞典』の「華夏・花夏」の項(冒頭の説明=「[[名] [“華”は、はなやか、“夏”は、大の意]」)の①の通り、「中国人が自国である中国を誇っている語」で、初出は「*書経-周書・武成“華夏蛮貊。〈略〉冕服采章曰_レ華、大国曰_レ夏”」である。

「あや」の同訓異字の語釈の中で、最後の「綺」の転義として「華美」の意の「華やかな美しさ」が出ているが、「文・紋・綾」には形容動詞が用いられていない。基幹と為る「文」の語義に「装飾」、古語に「かざる・うるはし」が有るのに、『日本国語大辞典』と『広辞苑』の親項目の見出し語では、字義の説明に於いて美的な飾りを加えない此等の文字は、最初の3/4乃至全部を占めている。前者の4番目の見出し語の「絢」では「あや」の前に形容詞の「美しい」が有り、転義の「きらびやかな美しさ」も形容動詞と「美」の漢字を使っているが、次の「彩」の中の「あざやかさ」は非漢字表示と為っている。「絢」の「美しさ」を形容する「きらびやか」は電腦漢字対応で「煌びやか」と有るが、『日本国語大辞典』の項目では『広辞苑』と同じく見出し語は仮名のみである。「[[形動] (“やか”は接尾語) ①きらきらときらめいて美しいさま。輝くばかりに見事で、はなやかなさま。②ことばをにごさないで、きっぱりとしたさま。はっきりしているさま」という語釈に於いても、漢字で「煌めいて」「様」「華やか」「言葉」「濁さない」と表記できる処は仮名を用いている。『広辞苑』の脱漢字の好みは「色取り・彩り」の「③はなやかな変化。おもしろみ」にも見られ、色・綾を添えるところが「面白味」の色(白)を字面から消している。『日本国語大辞典』の漢字抑制は「彪」の「とらの皮のあざやかな文様」に端的に現れており、「虎+彡旁」の字形の可視化という漢字使用の利点まで犠牲にされている。「様」との混同を避ける為の上記の「様→さま」とも関連するが、「彪」の語釈中の「文様」と「もよう」の不統一も気懸りである。「きらびやか」の語源説の「(1) キラビヤカ(綺羅美)の義」「(2) アキライヤカ(明彌)の義」の中で、「明」の仮名表記は上記の「あざやか」と合せて「鮮・明」の漢字を避ける傾向を思わせる。

「煌めく・輝く」の漢字を含む「輝煌」は『日本国語大辞典』で、「輝煌・輝煌」という見出し語で次の項目が設けてある。「[[名] かがやききらめくこと。*随筆・絵事鄙言(1799)“惟ふに松雪翁は喪然たる冠冕に任せて輝煌す” *修辞及華文(1879)〈菊池大麓訳〉通知“千百の晶燈は、妖魔不測の術に成りて輝煌星の如く” *張衡_西京賦“譬_衆星之環_レ極、叛赫戲以輝煌_”] 遅い時期の少ない用例に見られる馴染みの薄さも『広辞苑』での未収録の理由であろうが、『現代漢語詞典』では「[[形] ①光輝燦爛：灯火～|金碧～。②(成績等) 顕著；卓著；戦果～|～的成績」(「[[形] ①燦々と光り輝く様。“灯火が明々と輝いている”“金色と緑色に輝く” [建築物が豪華絢爛な様] ② [成果等] 顕著な様。際立って優れている様。“赫々たる戦果”“素晴らしい成果”)と、使用頻度の高さを思わせる説明が為されている。「彪炳」の両義に対応するこの形容詞は日本語では一義のみの名詞と成ったが、最初の用例で現代中国語に無い動詞の役割や中国語で正字と為る「輝煌」を使ったのに、中国語並みに発達することも無く『広辞苑』では採録

されていない。「輝煌・輝煌」の死語化の理由を「彪炳」と同様に字形から手掛りを求めれば、「光+軍」「火+軍」「火+皇」は俱に日本語の好みに合わない様に思われて来る。

『漢語大詞典』の「輝煌(輝煌)」の項は、「亦作“輝皇”」「(輝皇)とも」という説明が有る。「輝煌」は「①光彩奪目。光輝燦爛。②謂使光輝燦爛。③代称金銀珠宝。④照亮。照耀」(①目を奪うほど光彩を放つ様。燦々と光り輝く様。②燦々と光り輝く様にするを謂う。③金銀・真珠・宝石の別名。④照らす。照らし輝かす)との多義を持ち、「輝煌」は「光輝燦爛」の意だけであるが、「輝煌」の出典は明末～清初(①は呉偉業の詩、③は李漁の戯曲)以降のものばかりで、「輝煌」の用例は2番目の『文選・張衡「西京賦」』の上記引用を含めて時代が古い。文人画家桑山玉洲(名は嗣燦, 1746—99)が画論『繪事鄙言』で「輝煌」と書いたのは、呉(1609—71)、李(1610—80)等の頃の中国語の主流に影響された可能性も有ろうが、^{どこ}何処と無く火偏の字を敬遠し勝ちの日本語の傾向と結び付けければ面白い。

日本人は「地震、雷、火事、親父(大山風=台風)を最も怖い物とし、中国人が言う「水火無情」(水害・火災は情け容赦無い)と同様に火への^{おそ}畏怖を抱いているが、日本語で敬遠され勝ちの「炳」の「火+丙」の字形は二重の「火」を含む。陰陽五行説では十干(中国語では「天干」の方が一般的)の3番目の丙は火性の陽(或いは陽性の火)に割り当てられており、故に中国語では「丙丁」は火の別名と為り、日本語でも「丙」「丁」は『広辞苑』の説明の通り、「(火の兄^えの意)十干^{じっかん}の第三」「(火の弟^{おと}の意)十干^{じっかん}の第四」である。『辞海』の「炳②」の語釈は「点; 燃」(点す。火を点ける)で、派生語の「炳燭」は「燃燭照明」(蠟燭を点けて照明する)で、「老而好学」(老いて学問を好む[知識欲が盛ん])の比喩である。『広辞苑』の「炳」の「一として日月の如し」という例文は顕著の意であるが、^{きよく}陽の極とも言うべき「丙」の在り方は日の光を反射する月よりも自ら光を放つ日に近い。中華民族の2人の先祖と為る伝説中の炎帝神農氏・黄帝軒轅氏は「炎黄」と併称されているが、中原制覇の戦争で負けた炎帝が勝者の黄帝の前に位置するのは、「成者为王、敗者为寇」(勝てば王と為り、敗ければ賊と為る)という原理に反する様に見える。日本的な判官^{ほうがん}最良と違って火及びその活力への^{ほうがん}崇拜の象徴であると解したいが、中国では「丙丁=火」「未=羊」の属性から^{こうようこう}「紅羊劫」という不吉な言い伝えも有るので、「火」の要素を^{おそ}畏れ多い物として忌避する傾向が日本語に有るとしても理解し易い。

丙午、^{ていび}丁未の年に大規模の災禍が好く国家に降り掛るという「紅羊劫」の「迷信」は、直近の1966、67年の「文化大革命」勃発、「武闘」大乱で改めて^{けい}靈験を現している。日本でも江戸時代から丙午生れの女性に偏見が纏わり、^{けい}氣性が激しく夫を尻に敷いてその命を縮めると言われていた。終戦直後の1946年に文部省が国民生活の科学化を旨とする全国的な慣習調査を行い、報告書の中で丙午に関する俗説を「最も悪質の迷信」として喝破し、科学教育の成果が上らず出生数が減る「国家的の恥辱」の繰り返しを警戒すべきだと力説したが、20年後に巡って来

た丙午の年の出生率は前年より 25.4%も激減した。前回 (1906 年) の 4%減を大きく上回る落ち込みで、合成特殊出生率は空前の 1.58%に下がり、年内の人口 1 億突破の見通しも狂っていった。⁶⁾「幾百万人、幾千万人の習慣の力は、最も恐るべき力である」というレーニンの論断⁷⁾の通り、明治にも劣った時代の逆行は日本社会に於ける「空気」の支配力の強さを物語っている。『辞海』に今も冒頭で「古人迷信」(古人の迷信)と規定した「紅羊劫」の項目を残しているのと同様に、『広辞苑』の「丙午」の項目は次の様に差別的で有害な迷信を隠さずに紹介している。「干支の一。五行説によって、丙の火の兄^え、午は正南であるので、この年には火災が多いとする。また、この年生れの女は夫を殺すという迷信がある。五人女三“世の中の嫌ひ給ふ一”追放の甲斐も無く広く長らく流布して来た迷信の根源は、他ならぬ井原西鶴の浮世草子「好色五人女」(1686 年)であり、恋人会いたさに自宅に放火した八百屋お七が 1666 年の丙午生れだというのが由来とされる。一途な恋を貫く為に命をも賭けた様な作中人物の過激な行動に対して、「紅羊劫」は宋代の憂国の士・柴望の歴史考証「丙丁龜鑑」に由来した。戦国時代の紀元前 315 年(丙午)から[五代・後漢]天福 12 年(947 年、丁未)の間に、21 回の丙午・丁未に於いて国家の命運に関する変乱が度々起きたという史実に基づいて、彼は 1246 年(丙午)に朝廷に上申し危険性に就いて警鐘を鳴らした。不都合な真実が忌まれて投獄された破目に成った結末は、政治的な建言に命賭けの決意が要る生存環境の厳しさを実感させるものである。

文部省の「丙午迷信」断罪の 700 年前に唱えられた「紅羊劫」説は日本には入っていないが、^{ひつじとし}未年生れの女性は縁起が悪く「門にも立つな」という日本の迷信を思えば、政治に対する関心の濃淡に由る国情の違いを一層感じる。羊の温順な形象と掛け離れた「未年生れ=気性が荒い」との俗説も「羊=火」の為であるが、「丙・火」で合成した「炳」が日本語で発達しなかったのも自然な趨勢^{なりゆき}かも知れない。日本的な「恐火症」(火事恐怖症の意の造語)を映す漢語語彙として、中国語の意味と全然違う「火気」を挙げてみたい。『日本国語大辞典』では和製漢語として、「[[名] 火から出る熱気や炎。火の勢い。現在では多く“火”と同義に用いる」と説明されているが、『広辞苑』の「①火があること。火のけ。“一厳禁”②火の勢い。“一にあおられる”」の両義(「火があること」は第 6 版からの追加)は、『現代漢語詞典』の次の語釈・用例とは^{まさ}正しく風馬牛である。「^名①怒気。暴躁的脾氣; 压不住心頭的～。②指人体中的熱量: 年輕人～足, 不怕冷。③中医指引起發炎、紅腫、煩躁等症狀的原因。」(「[[名] ①怒気。荒っぽい気性。“心頭の怒気を抑え切れない” ②人体の持つ熱。“若者は活気が一杯で、寒さは平気だ” ③中国の伝統医学で、發炎・腫れ・煩躁等の症状を引き起す原因を指す。)日本語では専ら火の気体、気配、氣勢を指し危害の側面を強調するが、中国語では人間の気質・体質に関する用語として、②の様に積極的な寄与の意味合いを持ち、③の「内熱」(内に籠る熱・焦り)も其の旺盛な元気さの裏返しである。

『広辞苑』の「火気」の用例中の「あおられる」は漢字の「煽」を用いていないが、同辞書

の「煽動・扇動」「煽情・扇情」の見出し語は、「煽る」「煽てる」の場合では代替できない「扇」を使っている。「扇」の併記が無い「煽動罪」の項の様に正字は「煽」であるが、常用外漢字の為か「扇動」「扇情」の方がより好く使われている様である。火焰山の燃え盛る炎を消せる芭蕉扇を持つ『西遊記』の鉄扇公主（日本では「羅刹女」の名で知られている）の物語の様に、中国語では「扇」は「煽」乃至「火」と一体か密接な関係に在る。『漢語大詞典』を見る限り「扇動」の方が初出は早い（「①煽動；鼓動」[煽動。奮い立たせる]の最初の用例の出典は、[晋]孫蘇「為石仲容与孫皓書」[石仲容の為に孫皓に与ふる書]で、「煽動」の「①煽惑。鼓動」[煽て恐らす。唆す]の場合は、[清]魏源『聖武記』巻九である）が、『現代漢語詞典』では「煽動」の使用頻度の高さを裏付けている。『広辞苑』の「煽動・扇動」の項は一義のみで、「人の気持ちをあおり立てて、ある行動をすすめること。アジテーション。“群衆を一する”“一的文章”“教唆”」と説明されているが、これに当る『現代漢語詞典』の「煽動」は、「**動**鼓動（別人去做壞事）：～鬧事 | ～暴乱。也作扇動」（**動**）[他の人が悪い事をするよう]唆す。“大勢で騒ぎを起すよう煽動する”“暴乱を煽動する”「扇動」とも）と為っている。「扇動」は「**動**揺動（像扇子的東西）：～翅膀。②同“煽動”」（**動**）[扇の様な物を]揺れ動かす。“羽ばたく”②“煽動”に同じ）との両義であるが、「煽」と同音・同声調（第1声の shān）の動詞「扇」（異体字＝「搨」）の項目（第4声の名詞は別項目）では、単語の項はこれしか無い。対して「煽」の項目では単語の項は遥かに多く、日本語と共通の「煽動」「煽惑」（語釈＝「**動**鼓動誘惑 [別人去做壞事]」[**動**]〈他の人が悪い事をするよう〉唆し誘惑する）の他、日本語と同形・異義の「煽情」（＝「**動**煽動人的感情或情緒：導演很会营造氛围～」[**動**]人の感情や情緒を煽動する。“[戯劇・映画等の]監督は雰囲気作りがとても巧い”。『広辞苑』の項では「情欲をそそりおこさせること。“一的”）、又日本語に無い「煽呼」（＝「**口**」**動**煽動」[**口**語]）[**動**]煽動する）、「煽風点火」（＝「**比**諭鼓動別人做某種事 [多指壞的]」[他の人がある種の事〈多くは悪事を指す〉をするよう唆すことの譬え]）も有る。『広辞苑』にも「煽惑」の項が有る（＝「おだてまどわすこと」）が、使用頻度は中国語の比ではない。『日本国語大辞典』の見出し語は「扇情・煽情」の順と為っており、「[[名]感情, 情欲をあおりたてること」という語釈は中国語に近いが、漢籍の引用は無く和文の出典を2点掲げている。その「*寄席風－先代桂春団治研究（1942）〈正岡容〉」の中の「煽情の言」も、「*闘牛（1949）〈井上靖〉」の中の「適度の諧謔と煽情を交へて」も、火偏の付いた字を用いているが、「扇情」は「煽情」の書き換え」という補注の通り、後発の方が主流と成り今日に至っている。日本語の「煽」に「扇」が付き2字が同一化する傾向に対して、中国語では「扇」から発展した「煽」がより常用に成った観も有るが、「添火」（火の添加）とも言える変化は日本語の「避火」（火への回避）とは逆様である。

「紅羊劫」の「紅」は丙丁の「火」の色を指すが、日本語には「劫火」が有る（『広辞苑』の項＝「[[ゴウカとも] [仏] 人の住む世界を焼きつくして灰燼とするという大火。壞劫」とする）という大火。壞劫

中国的な「鮮烈」と日本的な「^{まろ}円やか」——両国の言語・文化の特質の一端 (1) (夏

の時に起こるといふ) もの、中国語の「紅火」及び「火紅」とは縁が薄いか無い。「紅・火」から成るこの2語の使用頻度の高さは、『現代漢語詞典』の用例を見れば分る。前者の項は「**形**旺盛；興隆；熱鬧：日子～| 生意～| 晚会開得很～| 紅紅火火過大年」(『**形**』旺盛。興隆。賑やか。「生活が充実している」「商売繁盛」「夕べ[夜のパーティー]は大変盛り上がった」「賑やかに春節を過す」)、後者の項は「**形**状態詞。①像火一樣紅：～的太陽。②形容旺盛或熱烈：～的青春| 日子過得～」(『**形**』状態詞。①火の様に紅い。「真っ赤な太陽」②旺盛さ或いは熱烈さの形容。「輝かしい青春」「充実した日々を過している」)と為っているが、『漢語大辞典』では前者(語釈＝「形容興旺、熱鬧、熱烈」[旺盛さ・賑やかさ・熱烈さの形容])の用例は20世紀後半のものだけで、後者の①「指物体燃燒發紅」(物体が燃燒し紅い色を呈する様を指す)の出典は[宋]蘇軾・陸遊の詩と為り、②「像火一樣的紅」の最初の出典も同じ宋代の梅堯臣の詩(③「比喻旺盛，有生氣。如：火紅的年代；火紅的青春」[旺盛な様， 生氣の有る様の比喩。例：熱く燃えた年代。輝かしい青春]は出典無し)である。『日本国語大辞典』では「紅火」の項は有り(語釈＝「[[名] 真っ赤な火。赤いほのお。紅焰。紅炎」)、漢籍の「*白居易-夜招晦叔」の他に和文用例を2点引いているが、「社会百面相(1902)〈内田魯庵〉矮人巨人・三“額上の雙眼を一団の紅火の如く輝かして”」という現代の例文も有るので、「紅火」の輝きは辞書や出版物から消えて久しい。中国の古典に親しむ日本語の圏外に置かれているのは意外であるが、「火」や「鮮明」への敬遠の現れと取れば説明が付く。

『広辞苑』には「劫火」と同音の「紅」関連の単語として、「紅花」(=^{こうか}「①紅色の花。②べにばな」)と「紅霞」(=^{こうか}「夕日で赤く染まった霞。夕焼けの雲」)が有る。同義の中国語のこの2語は文学作品や文章等で一定程度使われているものの、単純過ぎる故か『現代漢語詞典』では項も無く「紅」「花」「霞」の語釈の例示にも出ない。『広辞苑』の上記の語釈中の「紅色」「べに」「赤(く)」は表記及び中身の両方で、「紅火」「火紅」の語義とは別の意味で多義・多彩の感じがするが、3語の相互対照及び中国語との比較から様々な共通点・相違点が浮かび上がって来る。奇しくも日本の都道府県の数と同じ47の仮名を重ねられない様に集めた「以呂波歌」は、『広辞苑』の同項の語釈に併記されている別名の「色葉歌」や冒頭の「色は^{いろは}句へど」の字・義で、言葉の「始めに色有りき」を示唆する。作者は不明、10—11世紀に成立したと言われるこの歌より数百年前に、[南朝]梁武帝(502—49在位)の命を受けて文官周興嗣が初学者向けの漢字習得教材を考案し、1字も重複しない1000字を使った「千字文」を一夜にして創り上げた。天文・地理・政治・経済・歴史・社会・倫理・教育等の森羅万象の知識を織り込み、250の4字短句の韻文(全体が韻脚に由って9段構成)から為るこの奇抜な名文も、冒頭の「天地玄黄」の句に色を出している。

『広辞苑』で「^{げんこう}元寇」と「言行」の間に在る「玄黄」の項は、「①黒い天の色と黄色い地の色。天と地。宇宙。②黒色と黄色との幣帛。③(黒毛の馬が病むと黄色を帯びることから)馬が病

み疲れること」と為っている。『現代漢語詞典』で採録されていないこの単語は『辞海』で、「①天地の代称。②彩色絲帛。③病貌」（①天地の代称。②彩色の別名。③病む様）と説明されている。何れも古典の裏付けの有る定義は②も③も『広辞苑』と異なる（③の典籍引用＝『詩・周南・卷耳』：“陟彼高岡，我馬玄黄。”『爾雅・釈詁』：“虺頹，玄黄……病也。”郭璞注：“虺頹，玄黄，皆人病之通名，而説者便謂之馬疾，失其義也。”）が、『広辞苑』で3つの語義が揃っている処は中国語への尊重を感じさせる。さておき、「色葉歌」の「色」と違って「玄黄」は「天地」の後に来るので、「千字文」は「始めに天有りき」とも言うべきである。全文を締め括る「虚詞」（機能語）群の「焉哉乎也」の最後の字は、「地」の字の構成要素として冒頭の「天地」の対とも呼応するが、書出しの字は「天字第一号」という熟語を生み出している。

『現代漢語詞典』の当該項目の語釈は曰く、曾て数量や種類の多い物の順番を編成する際、好く「千字文」の語句の字を用いていたが、「天」は最初の句の1字目なので、「天字第一号」が第1或いは第1種類の中の第1号と為り、転じて最高・最大或いは最強のものを指す。甲、乙、丙、丁……で1, 2, 3, 4……を表す言わば「干支順」（造語）も、両言語の「甲」に「第一」の意味を持たせている。日本語の「甲乙付け難い」は中国語で「不分上下」で対応するが、『現代漢語詞典』に項目の無い「甲乙」は『辞海』①の語釈と典拠引用の通り、「謂等級次第」（等級・順序を謂う）「優劣」と同義である。「桂林山水甲天下」（桂林の景色は天下一）という熟語も「天字第一号」の発想に他ならないが、中国流の「甲級戦犯」を「A級戦犯」と言う日本流は「脱亜入欧」の産物の様に思える。英語のABCに当る物事の初歩の譬えは日本語では「以呂波」と為っており、手習いの始めに「いろは」を習うことから来たこの言い方は、順序を表す符号の意も兼ねるが、『広辞苑』の「いろは順」の語釈（「いろは歌の順序に排列すること。また、その順序」）は、『千字文』順（造語）の「天字第一号」に関する『現代漢語詞典』の説明と見比べれば、日本語の淡泊な行雲流水と中国の強烈な理念主導を浮き彫りにしている。

骰子・賽子を表す日本語の「采」と中国語の「色子」は義・音とも「彩」と通じるが、「采・彩」の深層・周縁への言語・心性面の探究では「光・火」への憧憬や畏怖を見出し、俱に「色」の文字又は要素が冒頭に出る両国の仮名或いは漢字の入門教材と巡り合った。広大無辺な「天網・天線（日本語で“空中線”とも言うアンテナを表す中国語）」に由って、「天字第一号」と「色」第一組（造語）の対が両言語の特色の表徴として現れて来るが、2つの鍵詞は「天色」という中・日共通の単語を合成している。『広辞苑』では「①そらの色。②そらもよう。そらあい。天候」と説明されているが、『現代漢語詞典』の語釈と例文は意味・使用頻度の違いを示している。「 天空的顏色，借指時間的早晚和天氣的變化：看～怕要下雨 | ～還早，你再睡一会_兒。」（〔名〕空の色。転じて、時間の早晚と天気の変化を指す。“空模様を見ると、恐らく雨が降るだろう”“まだ早いから、もう少し寝て下さいね”）中国語の転義には空の色から時刻を推し測る農耕民族の習性が濃厚に投影されているが、1つ目の例示の内容と文中の「怕」は自然への畏怖

を映し出す点が留意・分析に値する。

『現代漢語詞典』の「怕」の項は、次の様に詳解している。「①**動**害怕；畏懼：老鼠～猫 | 任何困難都不～。②**動**禁受不住；瓷器～碰。③**動**担心：他～你不知道，要我告訴你一聲。④**副**表示估計，有時還含有擔憂、担心的意思：這個瓜～有十幾斤吧 | 如果不採取果斷措置，～要出大問題。」(①**〔動〕**恐れる。畏怖する。“鼠は猫を恐れる”“如何なる困難も恐れない”②**〔動〕**耐えられない。“磁器はぶつかりの衝撃に弱い”③**〔動〕**心配する。“彼は貴方が知らないのではないかと心配して、貴方に一言伝えるよう私に頼んだ”④**〔副〕**予測を表す。懸念・心配の意を含む場合も有る。“この瓜は多分十数斤 [1斤 = 0.5キロ] 有るだろう”“若し果斷な措置を取らなければ、恐らく大問題が起きるだろう”) 動詞に当る日本語の「恐(畏・怖・懼)れる」(『広辞苑』の見出し語)の漢字表記は、他に「惧」も有るが「怕」は無いに等しい。(『日本国語大辞典』では唯一つ、『広辞苑』には無い「怕羞^{はくしゆう}」の項が有り、語釈は「**〔名〕**おそれ恥じること。はにかむこと。はじいること」で、「*水滸伝—第五回“那大王摸進房中，叫道，娘子，你如何不_レ出来接_レ我。你休_レ要怕羞_レ，我明日要_レ你做_レ压寨夫人_レ”」を典拠とし、「*通俗赤繩奇縁(1761)一・二“あなたが似[ごと]くに怕羞[ハクシウ<注>ハズカシガル]せば，如何して多くの銀子を求め得んや」という和文用例も付いているが、「怕」の単独の項も無いし字音語素には出ない。) 漢字を共有する両言語の字・語(単語・熟語)等の異同を比較する場合、この様な片方しか無いものが取り分け相違を示すものと為る。

この「異同」は『広辞苑』で、「不一致と一致。転じて相異なること。相違点。ちがひ。“本文の一を調べる”」と説明されているが、『現代漢語詞典』の「**〔名〕**①不同之处和相同之处:分別～。②<書>異議」(『名』①相違点と共通点。“其々の異同”②<文章語>異議)は、日本語との異・同の両面を見事に現している。『日本国語大辞典』では「*左思—魏都賦“星有_レ風雨之好_レ，人有_レ異同之性_レ”」を典拠に引いているが、語釈の「異なっていること。違っている点。相違」は現代中国語との相異が際立つ。もっとも、『漢語大詞典』(『辞海』は未採録)の何れも古典用例が付く語義を見ると、「①不同处和相同处」→「②不同；不一致」→「③引申為反对」(転じて、反对すること)→「④反对意見；異議」と、日本語と同様に「同」から「異」への比重が大きく成り、日本語以上の能動性で異義から異議に転義したという変遷が見て取れる(4項の用例の初出は①『漢書・朱雲伝』、②[三国・蜀]諸葛亮『前出師表』、③[唐]劉肅『大唐新語・公直』、④『宋書・謝靈運伝』)。

『広辞苑』の「おそれ【恐れ・畏れ・虞】」の最後の字は中国語と同じで、同項の「②心配。気づかい。不安」は『現代漢語詞典』の「虞」の「②憂慮」と通じる。類義の「怕」の有無は益々^{ますます}中国語独自の特徴を思わせるが、同じく日本語に無い「害怕」は害に対する恐れを窺わせる。「怕」の動詞と副詞を兼ねる処も日本語では有り得ない重層性であるが、名詞・動詞の「恐れ・る」と字面で対応する「恐らく」という④の適訳は、『広辞苑』では「**〔副〕**(恐ルのク語法オソル

ラクの転) ①口はばったい言い方であるが。②きつと。必ず。③思うに。多分」という多義を持ち、近世以降の用法である③は語釈及び「午後には一晴れるだろう」という例文の通り、「怕」に儘有る懸念・心配の意は余り無い。一般的に好ましいと思われる「晴」の予測は中国語の感覚では、「恐・怕」(中国語には「怕」の同義語として「恐怕」も有る)の字を含む副詞は似合わない。強いて言えば、午後は晴れと断定した気象予報士、午後の雨を見込んで野外撮影を準備中の関係者、敵の空襲に有利な晴れを嫌う戦争中の人々、といった特定の状況下の極一部の人でしか言わないはずである。中国語の表現はこの様に個々の漢字の固有の観念を律儀に尊重する気風が強いが、「看天色怕要下雨」という例文と結び付くと「天地玄黄」も天色への畏敬を思わせる。

注釈

- 1) 李輝『胡風集団冤案始末』(人民日報出版社, 1989年), 日本語版(千野沢政・平井博訳『囚われた文学者たち』, 岩波書店, 1996年) 56頁。
- 2) 邱永漢『中国人の思想構造』, 中央公論社, 1997年, 83頁。
- 3) 第5版では次の変更が施されている。①「博奕」「角」の下に付くより小さい活字の仮名は、括弧付きから括弧無しと成った。②例示の「一配」「一詩」等の単語は、「采配・采詩」と表記する様になった(熟語の「一の目」は変らず)。③「(23は“彩”に通用)」は削除された。④「采配の略」の後ろに「→彩」が加えられた。又、第6版では②は従来の方式に戻った。
- 4) 邱永漢『中国人と日本人』, 中央公論社, 1993年, 70頁。
- 5) 小川環樹・金田純一郎訳『完訳 三国志(三)』, 岩波文庫, 1988年改版, 163頁。
- 6) 「昭和史再訪 41年(1966年) ひのえうま “迷信の追放”に挑んだ村」、『朝日新聞』2010年12月18日夕刊。報道の中の「前年より46万人(25.4%)減った出生数」は、総務庁統計局監修、東洋経済新報社編集・発行『国勢調査集大成 人口統計総覧』(1985年)の表「11-1-1 男女別の出生児数と出生率(明治5年～昭和58年)」(821頁)、厚生労働省大臣官房統計情報部編集、一般財団法人厚生労働統計協会発行『平成23年 人口動態統計』(2013年)の「表4.1 年次別にみた出生数・率(人口千対)・出生性比及び合計特殊出生率」(上巻, 102-103頁)に裏付けが有る。明治32年(1899)以降の内閣統計局又は厚生省「人口動態統計」に由る調査の結果(前者の説明)として、同年と前年の出生数は1 360 974人と1 823 697人なので、25.4%減と為っている。同記事に言及の無い前回の丙午の同1 394 295人は、前年(1905)の1 452 770人より4%減という計算に成る。

総務省統計局監修、(財)日本統計協会編集・発行『新版 日本長期統計総覧』(2006年)第1巻の「2-1 男女別人口・人口増加及び人口密度(明治5年～平成17年)」(88-89頁)では、1906、66年の出生数は奇しくも同じ1,460千人で、其々の対前年(05年の1,517千人、65年の1,811千人)の減少幅は3.7%、19.3%と為る。90頁の注記の説明では、明治5年～大正9年は内閣統計局の推計に拠り、それ以降は国勢調査人口又は国勢調査人口を基準とする全国推計人口であるが、昭和20～46年(『平成23年 人口動態統計』では同22～47年)の各数値には沖縄県が含まれていない。筆者がこの数値を採用しない理由は先ず、本注記の冒頭で挙げた文献が複数有る事に在る。又、『平成23年 人口動態統計』の同表は、「昭和19～21年は資料の不備のため省略した」「昭和元年・5年・10年の出生数には、男女

中国的な「鮮烈」と日本的な「^{まろ}円やか」——両国の言語・文化の特質の一端 (1) (夏)

不詳が各1含まれている」といった注の様に、緻密な編集で高い信憑性を印象付けている為である。

高橋真一「明治・大正期における地域人口の自然増加と移動の関連性」(『國民經濟雜誌』187巻4号、神戸大学経済経営学会、2003年)に拠ると、1906年頃には丙午との関連で、届出の遅れや出生年等に就いて実際とは異なった届出を行う場合が多かった。(34頁)特殊要因がもたらした人為的な減少の実態は精確に掴め切れないだろうが、「上有政策、下有対策」(上に政策有れば、下に対策有り)という現代中国の熟語に因んで、その抜け道が考え出された事は「世に迷信有れば、民に対策有り」と言えよう。

- 7) レーニン『共産主義運動内の「左翼主義」小児病』(1920年)、ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所編『レーニン全集』、日本語版(マルクス＝レーニン主義研究所レーニン全集刊行委員会訳)第31巻(大月書店、1959年)30頁。原文の「もっともおそろべき」という仮名表記は、「天字第一号」の「最高・最大・最強」と「恐れ・畏れ・虞」に関する論述と字面で呼応するように、本稿では漢字に改めた。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

中国式的“鲜明”与日本式的“醇和” ——两国语言、文化的奥秘之一（1）

连载论文的本部分首先注目于日语往往因谓语放到句末而不到最后就不吐露本意，以及可以随语境或其时的气氛乃至压力等而途中临时调整甚至改变原先意图的特性，举出汉语在道出谓语及其后的关键词时就多意味着表明主旨的实例加以对比。以“9.11”后反恐怖主义斗争中美国政要向日本施压时所言“Show the flag”（亮出旗子），对照汉语、日语皆有的成语“旗帜鲜明”，推断初出于《三国演义》中形容军威的此语或是在近代日本转用于立场、态度，而该新意在当代中国远比日本多用又反映出国情、心性的相异。

本篇就吕荧在大庭广众之下义无反顾地为已遭逮捕、撤职的胡风直言辩护之举，联系旅日华人作家、实业家邱永汉喝破的中国人其实相当喜好博弈和政治，以及古罗马统帅恺撒率军破禁渡卢比孔河时表示破釜沉舟决意所称的“色子已经掷下”。由“博彩”这一切切入点引出汉语的“色子/骰子”和日语的“采·賽(子)·骰子”，通过求证、分析两国权威语义词典对字、词、熟语的释义、示例、出典等，从同用汉字的两种语言的诸多相通或不同之处去发掘和体味各自的特质。其中本文独特的发现、推论及认为值得注目、深究的现象、问题，限于概要的篇幅列出以下几点：

(1) 同一单词在中国和日本的词典中分别标作动词和名词的处理方式极为普遍，这不妨视为反映出两国社会生活、国民气质中常见的能动性强弱之差。

(2) 日语对未从汉语引进的“彪炳”的字形所含的“彡”、“火”，以及“鲜·明”色彩、“华美”形象，似带有意无意的回避或敬而远之的倾向。和凸现崇拜阳性活力、向往天·人光耀的汉语“添火”趋势相反的“避火”取向，可认为暗含对火的畏惧和反射阳光般的“月光”型性质。

(3) 汉语的表现建立在各个汉字所包含的内在观念之上，和渐趋少用汉字及汉语思维的日语之行云流水的恬淡相比，具有浓厚的理念要素、政治色彩和务实精神。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）